

H. H. ゴッセン考 ——山口忠夫先生に捧ぐ——

別 府 芳 雄

まえがき

筆者が中央大学名誉教授山口忠夫博士のご推挙により，“社会思想史”担任教員として本学に着任（昭和41年4月1日）して以来，20年目にあたる。（恐らく学園では，創立20周年を迎えて盛大な行事が催うされることであろう）。筆者が大過なく職を奉じつつ読書三昧の安穩の日々を享受しえたのはひとえに山口先生のおかげである。このたび筆者は「ゴッセン考」を書いて——拙（つた）ない論稿であるが——山口先生の机下に捧げて筆者の感謝の意を表したいと思う。

近頃は静かな“ゴッセン・ブーム”のような気がする。というのは学生諸君からヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセン（Hermann Heinrich Gossen 1810～58）について屢々質問を受けるようになったからである。

ゴッセンがドイツにおける限界効用理論の先駆者であり，“近代価値理論のほんとうの創始者”（ハイマン）であり，“彼の諸定理は，経済思想に〔その後も〕影響を及ぼしている”（ロール）人物であり、『人間交通の諸法則とそこから生ずる人間行為の諸規則の展開』（Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln）（1854）〔以下『人間交通の諸法則』と略称する〕の著者として，みずから彼の理論の意義を“天文学におけるコペルニク

ス” (Copernicus in astronomy) の榮譽に匹敵するものと確信していたのに世人から何らの反響を受けることなく絶望裡に若くして死んだ孤独な秀才であることは、かねがね承知していた。またゾンバルト (Werner Sombart 1863~1941) が『3つの経済学』(Die drei Nationalökonomie) のなかでゴッセンを称して“天才的白痴”(der geniale Idiot) と評したことも承知していた。またこれ程の人物にもかかわらずゴッセンの「生涯およびその人となりについては一般に多く教えられるところなし。コンラッド (J. Conrad) 『国家学大辞典』エルスター (L. Elster) 『国民経済学辞典』は屢々、古代無名の学者のためにも1項を割くことを惜しまざるにもかかわらず、ゴッセンの名は遂に閑却せらる」(小泉信三博士)ということも承知していた。★

★ ゴッセンの著作は当時まったく認められず、のみならず Handwörterbuch der Staatswissenschaften の第2版 (1900年) においてすら、ゴッセンの名は無視されていた。第3版が出て、彼の著作が記載されるようになった。わが国では、大正9年 (1920年) 8月、手塚寿郎教授による『ゴッセン研究』の労作が同文館から発刊されている。

筆者は静かな“ゴッセン・ブーム”がどうして起ってきているのかを知りえないまま——この悲劇の経済学者ゴッセンについていささか知りえたことを述べてみようと思う。

I. 生涯と人間像

ゴッセンは1810年9月7日、当時フランスの統治下だったデュレン (Düren) に収税吏〔財産調査官のこと〕の子として生れた。幼小より数学が得意だった。(この得意な数学がゴッセンをして“純粹経済学”研究へ

の道をひらくことになる)。

ゴッセンの思想内容は、a) 功利主義 utilitarianism b) 消費的接近 consumption approach c) 数学的方法 mathematical method の3つの特徴をもつものとして要約することができる。¹⁾

ゴッセンは父の希望に従って、まず法律を学んで司法官補となる。かたわら「ベルリンおよびボンにおいてホフマン (Hoffmann) およびカウフマン (Kaufmann) について経済学の講義をも聴講している。1834年、ケルンにおいて司法官試補 (Regierungsreferendar) となったが、行政実務に何らの興味を示さず、なお2ヵ年間大学に学びたいと希望したが、父の許可はえられなかった。1844年になって、はじめて第2回の国家試験に合格した。

まずマグデブルク (Magdeburg) の定税官となり、のちエルフルト (Erfurt) に移っている。父が死んだのち、1847年の末、職を退いてベルリンに住んでいたが、1848年3月革命勃発するや、自由主義に駆られてこれに加担した。翌49年、1ベルギー人と共に、火災、霜害、家畜保険の1会社を設立するためケルンに移住したが、この会社は成功しなかった。1850年事業から退いて、以後母と2人の姉妹とともにケルンに隠棲して著作に従事した。彼の著書は1854年夏ブルンスウィック (Brunswick) から出版されている。(ただし序文の日付は53年正月となっている)。

標題は前記の通り『人間交通の諸法則とそこから生ずる人間行為の諸規則の展開』であった。また、ゴッセンはみずから彼の理論の意義を高く評価し、天文学におけるコペルニクスの榮譽に匹敵すると豪語した。彼の自負もそれほど不遜なものでもないようである。というのはシュムペーターによると「われわれはゴッセンがコペルニクスの偉業 (Copernican feat) をなしとげたと自負しているのに、ややもすると微苦笑する傾きがある。しかしこの自負 (boast) も1見したところ以上にそれほど不合理なものではなかった。地球中心体系に代えるに太陽中心体系をもってし、“古典学派”体系に代えるに限界効用体系 (the marginal utility system) をもって

するの、同一種類の業績だから²⁾と弁護さえしている。周知のように古典派経済学はすぐれてイギリスの学問であり、資本主義的環境のなかで発展していったものである。しかし1870年代の初頭にはイギリスは世界の唯一の産業資本主義国ではなくなっていた。ということは古典派の学説の社会＝歴史的基礎が変革すべき時期にさしかかっていた。生産者の立場に立った労働価値説の放棄と消費者の立場に立った限界効用説の誕生ということは“直前の過去とのある断絶”(a break with its immediate past)を意味する。だから経済学における重要な革命(a complete revolution)とさえ見做されていくのである。³⁾(この辺の事情はあとで詳しく述べる)。

ゴッセンは彼の『人間交通の諸法則』を20年の思索の結晶と述べている。つまり「ここに世に問わんとする本書は、筆者の20年にわたる思索の結果である。かのコペルニクスが宇宙における共存の説明においてなしとげたところを、わたしは地上における人間の共存においてなしえたと信じている」と冒頭で述べている。しかし彼の独創性を自負したこの書物はサッパリ顧りみられず——限界効用理論の「体系の精緻な完成(his fully elaborated system)にもかかわらず、全く何の反響もうることなく」⁴⁾——憤慨したゴッセンは、書店にあったこの書物を取り寄せて、ことごとく自分で焼きすてたという。彼の著書は彼の存命中何らの影響ももたらさなかった。★

★ 1854年ドイツで公刊されたゴッセンの著作が完全に黙殺された理由については“ゴッセンの説明方法は今日でもなおその論点についていける読者が少ないほどだから”とブローグ(M. Blaug)は解説している。なお、同書の初版は世界に5部しかないといわれている。再版は1889年、3版は1927年に出ている。

70年代におけるその再発見と、続いてジェヴォンズ(Stanley Jevons)およびワルラス(Léon Walras)からかちえた称讃とののち、ようやくそれは

1889年再刊されるにいたった。★以来ゴッセンは開拓者として認識されてきたばかりでなく、彼の諸定理とその基本観念は他の人びとによって発表された後も経済思想に影響をおよぼしている。

★ ゴッセンの著書は英国博物館において（現在、この世にある恐らく唯一のものだが）、イギリスのアダムソン教授によって発見されたものである。

たとえその著書が、したがってその学説体系が日の目をみずに長い間うずもれていたとはいえ「この学派（限界効用学派）の数理的創設者〔のひとり〕がゴッセンであることに間違いない。『経済学の理論』の第1版において、その創始者であることを主張したジェヴォンズが、同書の第2版（1879年）の序文の中で、その主張を撤回し、ゴッセンにその創始者である地位を与えたことがその何よりの証左⁵⁾」である。ワルラスは彼の論文“未知の経済学者 ヘルマン・ゴッセン”（Un économiste inconnu, Hermann-Henri Gossen）（『社会経済学研究』 Etudes d'Économie sociale, 1885. 掲載）でゴッセンを紹介しているし、⁶⁾ジェヴォンズも1879年の彼の『経済学の理論』（The Theory of Political Economy）の第2版序文でゴッセンを紹介（ただしゴッセンの死後であるが）して以下のように述べている。——小泉信三博士の周知の名訳（寺尾琢磨教授改訂）を引用すると——「吾人は今やこの文献部門の歴史における真に驚嘆すべき発見を語る順序に立ちいたった。数年前、予の友人アダムソン教授（Prof. Adamson）★は経済学に関するカウツ（Kautz）〔ハンガリー生れの経済学者〕の著作の1つのなかに、ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセン（Hermann Heinrich Gossen）なる1ドイツ著作家の手になる1書が快樂および苦痛の理論を包含している旨を記した簡単な注意書のあるのに気がついた。

★ アダムソンはマンチェスターのオウエン・カレッジの教授。ゴッセンの名を

KautzのTheorie und Geschichte der Nationalökonomik 1858. に認め、次いでこれをドイツ書肆目録中に発見して、1878年8月入手して、ジェヴォンズに報告した。

アダムソン教授はこれを求める広告を掲げたにもかかわらず、1878年8月までこれに接するを得なかったが、その時にいたり幸いにもこれを1ドイツ書肆のカタログのなかに発見し、これを購入することができたのである。この書は1854年ブルンスウィック (Brunswick) において出版された。それは活字でうずまった278の頁よりなり、Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handelnと題されている……予はこの驚嘆すべき1巻の内容を、アダムソン教授が予に報告したままに記述するであろう。

ゴッセンは明らかに自己の理論の意義を無上に評価している。けだし彼は冒頭、天文学におけるコペルニクスの榮譽に匹敵するそれを経済学において要求しているからである。次いで彼は直ちに、数学的方法 (the mathematical treatment) はそれが唯一の正しき方法 (the only sound one) なるがゆえに、一貫して適用されねばならぬと主張するが、しかし読者をおもんばかって、高等解析 (the higher analysis) は極大極小を決定するに必要な場合にのみ明からさまに導入されるであろうと述べている。次に該〔本〕論文は経済学をば快樂と苦痛の理論 (the theory of pleasure and pain), すなわち個人および社会を構成する個人の集団が極小の労苦 (the minimum of painful effort) をもって極大の快樂 (the maximum of pleasure) を実現しうべき手続の理論として考察するに始まる。そこにおいて快樂の自然的法則は、ほぼ次のごとく明瞭に述べられている。いわく、同種の消費の増加は、連続的に減少しつつある快樂を生んで、遂には飽満点 (the point of satiety) に達せしめる、と。この法則を彼は幾何学的に例解し、次に進んで、1つまたはそれ以上の物からの全部快樂を極大に

達せしめる諸条件を研究する。

価値 (werth) なる語が次に導入されるが、これは、アダムソン教授の見解によれば、全く正確に効用を意味するもののごとく、ゴッセンは、物質的になると非物質的になるとを問わず、効用の量は、それが与える快樂の量によって測定されると指摘している。彼は有用物 (useful objects) を次の3つに分類する。(1)それ自身において快樂付与力 (pleasure-giving powers) を有する物、(2)他物と結合せる場合にのみかかる力を有する物、(3)快樂付与物の生産に対して手段として役立つにすぎざる物。彼は、もともと効用は1物と1個人との間の関係にほかならぬから、絶対的効用 (absolute utility) のごときものは全く存在しないと慎重に指摘する。次に進んではば次のごとく効用の派生的諸法則 (the derivative laws) を規定する。——同じ快樂付与物の各部分は極めて異なる効用度をもつ。一般に各人に対してはかかる諸部分のある限られた数 (only a limited number of such portions) のみが効用をもつ。この限界を超えて付加されたもの (addition beyond this limit) はすべて無用であるが、しかしこの無用点 (the point of uselessness) は効用が強さのすべての階段または程度を通過せる後において初めて到達される。かくて彼 (ゴッセン) は実践的結論を下していわく、各人は自己の資力をば、各々の快樂付与物の最終増加分 (the final increments) が彼に対して均等効用 (equal utility) を与えるよう分配すべきである、と。

次にゴッセンは労働を取り扱う。この場合、出発点は、あらゆる生産物の効用はこれが生産に要した労働の苦痛を差引いた後に推定されねばならぬという命題である。労働の苦痛の変化に関する彼の説明は、著るしく予 [ジェヴォンズ] のそれに類似し、これを図表的に示すと共に、われわれは労働をば生産物の効用が生産の苦痛と等しくなる点まで継続せねばならぬと推論している。交換理論を論ずるに当っては、彼はいかに物々交換が効用を激増せしめるかを示し、次いで、交換は次に受授さるべき部分の効用

が等しくなる点まで続行されると推論する。ここには交換理論の複雑な幾何学的表現が与えられている。地代理論は最も一般的に検討されており、巻末には幾分曖昧な社会的思索が述べられているが、それはアダムソン教授の見解によれば、この論文の前半ほどの精彩はない〔という〕。

以上述べたところから、経済学の一般諸原則と方法に関して、ゴッセンが完全に予（ジェヴォンズ）に先駆していることは十分明らかである。予の解し得る限りでは、彼（ゴッセン）の基本理論の扱い方は、予が構想し得たものよりもさらにより一般的かつ徹底的である。この書を論ずるに当って、予はこれを読み得ないという重大な困難下にあるが、しかしアダムソン教授が予（ジェヴォンズ）のために書きまたは読んでくれたところや、該書の図表や記号的部分を検討したところから判断すれば、予はゴッセンが彼の理論の展開において不運だったと推察したのである。クールノー（Cournot）および予のなしたごとく不定函数（undetermined functions）を取り扱い、かつ最少限度の仮定を導入する代りに、ゴッセンは、簡単のために、経済函数は直線法則（linear law）に従うものと仮定し、ために彼の効用曲線は一般に直線形（straight lines）をとるのである。この仮定によって彼は該書の多くの部分を占める多量の正確な公式と表的結果（tabular results）を求むるを得たが、しかし経済科学の函数がめったにあるいは決して真に直線的ではなく、通常直線から著るしく隔っている以上は、予はゴッセンによって導入された記号的および幾何学的な例証と展開（the symbolic and geometric illustrations and development）は、大部分、処を誤った創意（misplaced ingenuity）の1例に数えらるべきものと考え。予は予自身のために次のことを付言したい。いわく、彼は本書のなかに樹立されたごとき交換方程式に真に到達しているとは思われない。いわく、資本および利子の理論は欠けている。いわく、内容の展開の間には、真理の共通基礎より生ずる相似を別とすれば、全く何の類似もないと。

しかしながらゴッセンの体系の基本理念と予（ジェヴォンズ）自身のそ

れとの間の符合 (the coincidence) は極めて著るしきものがあるから、予はまず第 1 に、予が 1878 年 8 月以前にはゴッセンの著書の存在に関する如何なる暗示をも、見たこともないばかりか、これを耳にしたことすらなかったと言明したいし、第 2 には、なぜ予が右のごとく見聞の機会に恵まれなかったかを説明したいのである。予は不幸にして語学力乏しく、多大の努力にもかかわらず、遂にドイツ書を読むに十分なほどドイツ語に慣れることができなかった。予はかつて人に援 (たす) けられてカントの論理学講義草案 (the logical lecture notes of kant) の 1 部をひろい読みできたが、これが、ドイツ文献における予が唯一の業績である。

さてゴッセンのこの著書はドイツの大部分の偉大な読書家にさえ久しく知られずにいたものである。アダムソン教授は、この書はドイツにおいて些少の注意をもひいた形跡はないといっている。アムステルダムの著名博学な経済学者エヌ・ジー・ピアソン教授 (N. G. Pierson) は予に書を送って次のごとくいった。“ゴッセンの著書は私の全然知らざるものである。ロッシャー (Roscher) も、その労作『ドイツ経済学史』(History of Political Economy in Germany)★においてこれを挙げていない。私はそれが引用されたのを見たこともないが、しかしこれが入手に努めるであろう。かかる驚嘆すべき〔ゴッセン〕の著作が、万巻を読破したロッシャー教授のごとき人にさえ全く知られずにいたということは、極めて不思議である”と。

★ ウィルヘルム・ロッシャー (Wilhelm Roscher 1817~1894) はブルーノ・ヒルデブランド (Bruno Hildebrand 1812~1878) およびカール・クニース (Karl Knies 1821~1898) とともに旧歴史学派の 3 巨星をなす。ここではロッシャーの *Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland*, München, 1874. を指す。後半世紀に広く普及した名著として知られる。

ドイツ経済学を専攻するクリッフ・レスリー氏 (Mr. Cliffe Leslie) もまた予 (ジェヴォンズ) に、該書 (『人間交通の諸法則』のこと) の存在に全く気づかなかったと報じている。★かかる状況のもとでは、予がゴッセンの著書を発見するよりも、予が快樂苦痛の理論を発見する方が、遙かにありうべきことであつたろう。そして予は、第1版およびこの版の双方にあいて、ベンサム (Bentham)、シーニョア (Senior)、ジェニングス (Jennings) その他の著述家たちの若干の章句を慎重に指摘しておいたが、予の体系は多かれ少なかれ意識的にこれらから展開されたのである。予は優先権に対して全然無関心だとは言明し得ないのであって、予の理論の大様が最初発表された1862年以来、予はそれが直ちに1箇の斬新にして1箇の重要な理論たるを覚えてもって快しとしたことも屢々である。いまこの序のなかに述べたことから、斬新さ (novelty) はもはや予の理論の主な特徴に数え得ないことが明らかとなった。多くは明らかにデュピュイ (Dupuit) に属し、残りの大部分は、ゴッセンに与えられねばならぬ。しかしこの遺憾の念も、もし予にしてかくも痛ましく閉却され来った1書を了解せしめ尊重せしめるに偶々 (たまたま) 成功するとすれば、容易に満足 of the なかに呑み込まれるであらう。

★ ゴッセンの著書1冊は大英博物館の図書館に見出されるであらう (整理番号 8408. cc. 16)。右蔵書に捺印された日付の示す通り、該図書館もこれを1865年5月24日までは入手することができなかった。

ゴッセンに関してはほとんど何事も予 (ジェヴォンズ) にわかっていない。その生死も定かではない。該書の扉に彼はみずからを “Königlich preussischem Regierungs-Assessor ausser Dienst” と記しているが、これは退職プロシヤ王国政府陪審官と訳してよかろう。しかし、ところどころに散見する論調から推 (お) せば、彼が、傷けられたとはいわぬまでも失意

の人 (a disappointed man) であったと思われる。今や彼の著書は世の認むるところとはなったが、これによってかかる印象は毫（ごう）も緩和されるどころか、むしろ一層深められざるを得ない。該書は彼の唯一の持論 (cherished theory) [執着した理論] を包含するもののごとくである。けだし予はゴッセンの名のもとに他のいかなる出版物あるいは学術論文の痕跡をも見出し得ないからである。まことにこれら忘れられたる著作の歴史は、一箇の奇怪なる、そして人をして沮喪せしめるところのもの (discouraging one) である。しかし見るを得ざる人びとの眼が開かれる日も必ず来るに相違ない。その日にはクールノー (Cournot) およびゴッセン (Gossen) のごとく人智の感謝なき野に耕して、恐らくはよく予期したであらう忘却あるいは嘲笑 (the neglect or ridicule) にあったところのすべての人びとに、当然の榮譽が与えられるであらう。まことにこれらの人びとは真に榮譽のために働いたのではない。彼らが理論を産む、なお樹木が実を結ぶと異るところはないのである⁷⁾と。以上のごとくジェヴォンズはゴッセンについて深い理解と同情をもって紹介している。★

★ 小泉博士はutilityを效用としておられるが、小論では効用という文字に統一した。

この辺の事情について——繰り返し述べるようだが——ハイマンは「1874年に、あるイギリスの学者〔アダムソン教授のこと〕が、ふとゴッセンの名前を見つけて、ドイツの古本屋のカタログに1冊でも探し出そうとした。図書館には1冊もなかった。彼がついに1冊を手に入れた時に、彼はジェヴォンズの注意を喚起した。ジェヴォンズは、のちのカンティヨンの場合のように、この場合にも寛容に、急いで1879年に出た彼の『経済学の理論』の第2版の序文に、自分より先にゴッセンが同じ考えを展開していたこと〔つまりゴッセンの優先性〕を強調した。ゴッセンの著

書はドイツでは再刊されたけれども英訳はない。〔ゴッセンの〕拙い文体 (clumsiness) と彼の自負 (pretension) がそうさしたのであった⁸⁾とわかり易く説明している。★

★ ゴッセンの原著は、細字280余頁〔アムステルダムの Liberac レプリント版 (1967年) で277頁,〕目次もなければ章もなく節もない。何とも無体裁 (clumsy) な本であることは確かである。

ワルラスが彼の論文「未知の経済学者ヘルマン・ゴッセン (Un économiste inconnu, Hermann-Henri Gossen)」(『社会経済学研究 Etudes d'Économie sociale, 1885掲載) でゴッセンを紹介したことは既に述べた。しかしワルラスにしても、ジェヴォンズにしても、ゴッセンの優先性を認めたのは、ゴッセンが死んだのち20余年もあとのことである。(ジェヴォンズは1879年にゴッセンについて述べ、ワルラスは1885年にゴッセンについて語っているが、しかし惜しい哉ゴッセンは1859年に死んでいる)。

また、ゴッセンは名うての反カトリック (notoriously anti-Catholic) であった。彼の理論体系の頂点といわれる改革プログラムの急進的な自由主義 (the radical liberalism of his program of reform) については一般に無視されていて語る人もないが、ゴッセンは「自由交換が行われ、それによって最適の社会的満足 (the optimum social satisfaction) が得られるための必要条件は、各人が能力に応じて職場を択び、仕事そのものを択ぶ自由をもつということである。ところが、これが土地の私的コントロールに妨げられて、実現されていない。だから土地の国有化 (the nationalization of land) が必要⁹⁾」だと主張した。★

★ 各個人が各自の最大快楽を追求することが全体として最大幸福をもたらすものとする、各個人は自己の幸福を自由に追求する必要がある。まず“土地の

私的所有”の障害がある。各個人が最大の富をえんがためには、自己の労働のための最も有効なる場所を択ぶことができなければならないであろう。ところが土地の“私有財産権”は、この自由の選択を阻害する。だからゴッセンはあらゆる人が土地を要求し、かつ利用できるように“土地国有化”を提唱した。

またゴッセンは資本の私的所有による弊害にも同じような考え方を示す。つまり「彼は国家的な信用制度 (national credit institution) を提唱して体系を完成★した。その場合にはプルードン (Proudhon) との論争もあった。因みに、ゴッセンは、経済学者としては、プルードンよりはるかにまざっていた。このようにして、ゴッセンは、あらゆる市民が資本と土地に関しては平等の地位におかれ、競争場裡の勝敗がただ能力だけによってきめられるようになることを提案¹⁰⁾」した。

★ ゴッセンは資本不足に対しては“大貸付金庫”を設立することを提唱している。

晩年のゴッセンは音楽の数理研究などを試みたが、完成をみることもなく、腸チフスのあと増悪した肺結核のために死んだ。時に1859年2月13日、まだ48歳の若さであった。しかしゴッセンは限界効用理論の開拓者として認められているばかりでなく、彼の法則が経済思想に与える影響はきわめて大きいものがある。

Ⅱ. ゴッセンの法則

財が人間にとってもつ“特別の関係”(die besondere Beziehung)を効用(Nützlichkeit)と名付ける。種類に関係なく、欲望充足に役立つばあい効用をもつ。効用は関係をあらわす概念(Relationsbegriff)であって財自

身の性質 (Eigenschaft) ではない。効用を数量的に示す理論が限界効用説 (die Lehre vom Grenznutzen) である。わかり易くいうと「いやしくも快樂を生じ、または苦痛を防ぎ得るものは、いかなるものでも効用を有し得る。J. B. セー (J. B. Say. 1767~1832) は正しくまた簡潔に効用を定義して“諸物のもつ何らかの仕方で人間に役立ち得る能力” (la faculté qu'ont les choses de pouvoir servir à l'homme, de quelque manière que ce soit.) とした。飢餓の苦痛を防ぐ食物、冬の寒さをさえぎる衣服は争うべからざる効用を有する¹¹⁾ ものである。「効用なるものは、物の質ではあるが、内在的の質 (no inherent quality) ではない。それは、人間の要求に対するその関係 (relation) から起る物の状況 (a circumstance of things) と説く方がよい。シーニョア (Senior, N. W. 1790~1864) が最も的確にいうごとく、“効用はわれわれが有用なりとよぶ物に存する固有の質 (intrinsic quality) をさすものではない。それは単に人類の苦痛および快樂に対するその関係 (relations) を表現するにすぎぬ。” ゆえにわれわれは決して絶対的にある物件 (objects) は効用をもち、他の物はもたぬということはできぬ。[たとえば] 坑中に横たわる鉱石、探索者の目をまぬがれた金剛石 [ダイヤモンド]、収穫せられざるままなる小麦、消費者がないため採集せられずにある果実は、ぜんぜん効用のないものである。最も健康的にしてかつ必要なる種類の食物といえども、これを蒐集する手と早晚これを食う口とがあるのでなければ、無用である。いな、問題を仔細に考察すれば、われわれは同じ貨物 (commodity) のすべての部分が等しい効用をもつということもできない。たとえば、水はほぼあらゆる物質のうち最も有用なるものといってよい。1日1クォート (quart) の水は、人を最も苦しい死に方をすることから救うという高い効用をもっている。1日数ガロン (several gallons) の水は厨房、洗濯のごとき目的のため多くの効用をもつであろう。しかしこれらの用途のため十分の供給が保障せられたのちは、それ以上の付加量は比較的どうでもよい事項である。さればわれわれのい

い得ることはこれだけである。〔すなわち〕水は一定の量までは欠くべからざるものである。それ以上の量はさまざまな度の効用をもつであろう。しかし一定の量を超えると、効用は漸次ゼロに降下する。それは負となることさえあり得る、すなわち、同じ物質のそれ以上の供給は不便となり、有害となりうる¹²⁾」ものなのである。さらに「われわれは注意して1貨物より生ずる全部効用 (the total utility) と、そのいずれかの特定部分に付着する効用とを区別しなければならぬ。かくて、われわれの食べる食物の全部効用は生命の維持なることに存し、無限大と考えられ得べきものであるが、われわれが日々食べるものから10分の1を控除するとしても、われわれの損失はただ些少にすぎぬであろう。われわれは確かに食物のわれわれにとっての効用全体の10分の1は失わぬであろう。われわれが果して何らかの損害を蒙るや否やも疑わしいかも知れぬ¹³⁾」——とジェヴォンズが巧みに解説しているとおり、われわれは、ここで“効用”(utility)の概念と財の全部効用〔または総効用 (total utility)〕とその財の特定部分における効用度 (degree of utility) の差異について知りうる。★

★ 効用 (utility) はラテン語のutiから出ている。“役に立つ”という意味。

ゴッセンは人間の欲望とその充足に用いられる財の数量との関係を考究して、主観的価値論の前提となるべき諸法則を提唱した。ゴッセンが提唱したこの仮設は、その後“限界効用逡減の法則”(the law of diminishing utility) “限界効用均等の法則”(the law of equi-marginal utilities)として定式化されて、限界効用のうえから消費者行動理論上、基本的な役割を果たすことになる。これらの法則はゴッセンにちなんで、それぞれ“ゴッセンの第1法則”(Gossen's first law) “ゴッセンの第2法則”(Gossen's second law)とよばれ、第1. 第2を合わせて、ふつうゴッセンの法則とよぶ。★

★ ゴッセンの第1法則という名称は、のちにウィーザー (Friedrich von Wieser 1851~1926) によって唱えられ、第2法則という名称はレキシス (Wilhelm Lexis 1837~1914) によって名付けられ、のちにリーフマン (Robert Liefmann 1874~1941) によって彼の経済学体系の基本原理となっていく。

ゴッセンは彼の著書の冒頭でいう「人間はその生活を享樂しようと欲するものであって、その生活目的をば生活上の享樂をできるだけ最高の高さに高めようとするものだ¹⁴⁾」と。つまり「人間はその全生活の享樂の総計が最大となるように享樂を仕向けなければならない¹⁵⁾」ということである。この目的は普遍的なものであるから神の意図である。したがって「この原理は上は王侯より下は乞食にいたるまで、ゆりかごから墓場にいたるまで例外なく行われる¹⁶⁾」べきものである。だから神が“人間よ、わが創造の法則を探し、そしてその法則にしたがって行動せよ!”といわれるのはそのためである。

だから、われわれは、生活享受の力の働きの従うべき法則をまず探す必要がある。そして、われわれのなすべきことは「この原理と享樂能力が働くにあたって行われる法則¹⁷⁾」を探求することである。「経済学は、いわゆる物的財 (sogenannten sachlichen Gütern) をもって人生をおくらんとするに当り、その據るべき法則と最大の効果 (möglichst günstigen Resultat) をうる法則を発見することである。それゆえにいわゆる物的財の法則の応用 (Anwendbarkeit) に限られているものである。しかしこの制限には何ら確固たる根拠はない。というのは享樂人にとっては、享樂が物質的であろうと非物質的であろうとどうでもいいことだから¹⁸⁾」である。こう考えると、経済学の目的は、どうしたら困難と較べて〔生活〕享樂の分量が最大となるかの研究ということもできる。

では、どのようにして享樂がおこなわれるか。あらゆる享樂には次の2つの普遍的特徴 (gemeinschaftlichen Merkmale) をもっているということ

がまず指摘できる。

第(1). 同一の享樂は、これを間断なく続けるときは、絶えず減少して
いって、ついには飽満 (Sättigung) の状態に達する。¹⁹⁾

これは前述のごとく“限界効用逓減の法則 (またはゴッセンの第1法則) ”といわれるものである。つまりすべての享樂はその満足 (Befriedigung) が継続するに従って逓減する。また財の所有数 (Güternvorrat) が増加するにしたがって新たに加わるその何分の1かの同一財の効用は逓減するということである。わかり易くジイドの解説を引用すると「一定量のパンは能 (よ) くわれわれを満腹せしめるし、一定量の水は能 (よ) くわれわれの渴を医することができる。しかるに、およそ欲望はみたされること多きにしたいがい漸次にその強さを減じて飽満の点にいたって遂に消滅する。さらにこれを充 (みた) さんとするときは、嫌惡の念と変じ苦痛の情と化するものである²⁰⁾」と。これはきわめて單純な事実であり、この事實は、つねにまたいつでも妥当する。各人は、彼の肉、パンその他あらゆる消費財に対する〔現時〕の欲望が、その満足が続けていくとき、強度が減退することを知っており、各自の家政は日々これに順応していることを知っている。

またジャム (Emile James) は“合成的引用”として第1法則 (première loi) に「しかし、富の所与の数量の各単位は、他の単位に代替されうるから、そのどれも、満足される欲望のうちの最低の満足によってあらわされる価値以上の価値をもつことはできない²¹⁾」と付記しているが、この点、ジイドは次のごとく解説している。「いま1日のあいだに使用する水が、番号を付けた数箇のバケツ (eine Anzahl bezifferter Eimer) に分けられて棚の上に排列されていると想定してみよう。第1バケツ (der Eimer Nr. 1) は渴を医するものであるから、最も効用大 (die höchste Nützlichkeit) なるものである。第2バケツは炊事の用に供するものであるから、やや小なる効用をもつ。第3バケツは洗面沐浴 (Reinigung) のための

ものであるから、その効用はさらに小さい。第4バケツは馬に水を与えるためのものである。第5バケツは「花壇の」草花に水をかけるのに使う。第6バケツは台所の敷石を洗うのに使う。第7バケツにいたっては、何の用もないから泉から汲みとろうとは思わない……。ということは、バケツの水の効用が最大から最小へ (von der grössten bis zur geringsten), つまりゼロまで降下しさらにゼロ以下にさがる逓減的効用 (abnehmende Nützlichkeit) をあらわす²²⁾」ことを意味する。しかも「もし誤って第1バケツをヒックリ返して飲料にあてる水を失ったばあいには……他のバケツの水を飲料にあてれば、それでいい。ではどのバケツの水を当てたらいいか。むろん効用の最も少いもの、つまり最後のバケツの水をもって充当すればいい。ということは最後のバケツの水の価値が他のバケツの水の価値をきめるということになる。」²³⁾だからどのバケツも同じ価値をもち、それどころか相互に代替可能なのである。だから供給の1単位による満足の大きさをその1単位の限界効用とよぶならば——いかなる個別な単位の価値も限界効用に等しくなる。★

★ ただし、限界効用逓減にも“例外”はありうる。たとえば1オンスの石炭は燃料として全く用をなさない。それが増加してストーヴに投ぜられてはじめて燃料としての効用をもつ。したがって効用は財の数量の増加とともに減少（逓減）するとはいえない。また蒐集家がある財の蒐集において、完成達成にしがって、ますます追加単位を熱望するということもありうる。

ゴッセンの第2法則は、第1法則と、すべての欲望の完全な満足を達成することが不可能であるという付加的な公準 (postulate) から出てくるものである。ただし、第2法則は第1法則と違って、これは公準ではなく、1つの“定律” (theorem) である。

第(2)は「諸種の享楽について、選択はできるが、それらすべてを享楽で

きるだけの時間がないばあい——最大級の享樂をえようとすれば、おのおのの享樂の1部分づつを（部分的に）、次のような割合で享樂すべきである。つまり、おのおのの享樂の大きさが、その享樂を止める時点〔終止時点〕で、すべて均等であるように、享樂すべきである²⁴⁾となっている。これがゴッセンの第2法則（Gossen's second law）であり、ふつう“限界効用均等の法則”（law of equi-marginal utilities）として知られているものである。この第2法則はわかり易くいうと「個々の享樂の絶対的大きさがどのように種々異なっているにしても、かれの享樂の総量を最大ならしめるためには、それらすべての享樂を部分的に、しかもつぎのような比例で調達しなければならない。すなわち、各享樂の大きさが、その調達の中断される瞬間において、すべてのものが均等であるような比率で、調達しなければならない」というのである。たとえばここにA, B, Cの3種の欲望があり、その各欲望の享樂はゴッセンの第2法則によって順次下の方へ数字のとおり漸減してゆくと仮定する。〔下表参照〕、そうすると、各欲望の

A	B	C
10	8	5
8	4	4
6	2	3
4	1	0
0	0	

享樂はどの1点できりあげることが享樂の総量を最大ならしめることになるであろうか。

むろん、かれの投じうる時間や費用がいくらでもあるなら、各享樂がゼロになるまでくりかえしていった方がよいことは明りょうである。しかし人生は短く——じっさいにゴッセンは48歳で死んでいる——費用には限りがある。そこで、その費用のゆるす範囲内でかれ

のなしうることは各欲望の最後の（いいかえれば、限界の）享樂単位が“均等”となるように、つまり表の4のところできりあげることが、もっとも望ましい。それ以外に享樂の総量を最大ならしめる方法はない²⁵⁾——ということなのである。

貨幣を例にとって説明すると、われわれが貨幣を使用するばあいには、

いつも効果最大な用途で使用しようとするものである。つまり、一定額の貨幣をもったばあい、購入しうべき最も重要なものを、まず購入する。しかもある財を購入すると、その効用は逡減するものである。〔第1法則による〕。効用が減少すれば、その次に重要なものを購入するであろう。そうすると、それも重要度が減少するから、さらにその次のものを買う。こうして一定の貨幣額で購入する財の効用に大小があると、人は必ず購買の対象を効用の小なるものからヨリ大なるものに移す。しかも購入を増すにつれて財の効用が減少するとすれば、購買終止の時点の各財の効用はできるだけ均一とならなければならない。これを限界効用均等の法則（あるいはゴッセンの第2法則）というのである。つまり、極大の快樂（maximum pleasure）が均一水準の欲望満足（uniform level of want-satisfaction）から得られるということである。

そののちのゴッセンの仕事は、これらの法則の“入念な仕上げ”（elaboration）であった。ゴッセンは「外界はわれわれに対して価値をもつ……〔したがって〕外界の各部分がもつ価値も、それらがわれわれに与える生活享樂の大きさ（die Grösse des Lebensgenusses）によって精確に測定され得る²⁵⁾」と述べているが、そのばあい、第1法則がある以上、同じ財の個々の単位は所有量にしたがって違った価値をもつことになり、1定量を超えたばあいには単1の単位は何ら価値をもたないということになってしまふ。だから価値は相対的にのみ理解されなければならない。²⁶⁾ゴッセンが「世にはいわゆる絶対的価値をもつものなし²⁷⁾」と述べたのもそのためである。むろん、各部分の財の効用の絶対の大きさ、したがってまた限界効用の大きさを測定（schätzen）することができないものであることはいうまでもないが、——「所有財をいくつかに等分すれば、その各部分の財の効用は最後に加わった部分の財の効用に等しくなる。この最後に加わった部分の財の効用、つまり最小の効用（diese geringste Nützlichkeit）をフォン・ヴィザー（V. Wieser）が“限界効用”（Grenznutzen）と名づけた

のである。したがってどの等量の部分の財をとって独立に観察しても、その効用はすべて限界効用に等しい。ただし全部の財の効用が限界効用に部分の数を乗じたものなどと「決して」²⁸⁾思ってはならない」ものなのである。

従来の古典派経済学では、使用価値による交換価値の説明が困難であった。あの“価値のパラドックス”(paradox of value)、つまり有用なものが低い価格しかもたず、遙かに必要でないものが高い価格をもつという事実の説明が困難であった。たとえばスミスは『国富論』において、水は極めて有用なのに、その交換価値は極めて低い。これに反してダイヤモンドは効用乏しいのに交換価値は高い。だから使用価値〔効用〕からは交換価値は統一的に説明できない——と考えた。しかしこの“水とダイヤモンドの価値のパラドックス”も“限界効用”という概念を使えば、いたって簡単に解決できる。というのは水はきわめて豊富に供給される。したがってその全部効用(総効用)は高い。しかし、これ以上に水が付加的に供給されても、その“限界効用”はきわめて低いことは自明である。だから交換価値が限界効用に依存することを論証すれば、水の交換価値の低さというスミスのパラドックスは解消する。

こう考えると、“限界効用”という概念を案出することによってアダム・スミス以来のパラドックスが解消されたことになる。これはゴッセンの理論に負うところが多いといえるであろう。

Ⅲ. 限界効用理論の源流

ゴッセンが限界効用理論の源流に属するものの1人であることは確かであるが、しかしけっしてゴッセンが限界効用価値理論を創始したわけではない。ゴッセンはただ“再発見”した「だけ」と考えるべきであろう。限界効用理論は“消費者行動に関する1つの理論”(a theory of con-

summers' behavior) ではあるが、それはただ従来の経済学のなかでの叙述様式の変化、つまり 1 つの新しい叙述の仕方と考えた方が理解し易いからである。限界効用理論はもし“限界”という形容詞をとり去って効用価値理論とするなら、けっして新らしい学説とはいえない。シュムペーターは「われわれはこの理論がアリストテレスの根幹 (Aristotelian roots) から、スコラ学者によって展開されていたのを知っているが“効用と希少性” (utility and scarcity) とのターム (称呼) による彼らの価値および価格の分析には、ほかならぬ“限界”という装備が欠けていたのだ²⁹⁾」といい「その死後にいたって、最大級の名声を博したゴッセン (H. H. Gossen) とデュピイ (Dupuit) 以外に 3 名」の名を挙げうるとして——その 3 名として、アウグスト・ワルラス (Antoine August Walras, 1801~66. レオン・ワルラスの父), ロイド (Lloyd), およびジェニングス (Jennings) を挙げ、かつ「限界効用の概念は、これら 3 人の著書のなかに明瞭にあらわれている³⁰⁾」と確言している。してみると、ゴッセンは限界効用理論の先駆者たちのうちの 1 人であっただけであり、これら先駆者たちは、これまでの経済理論分析の“工具箱” (tool-box) のなかに新らしい道具を 1 つ付加しただけにすぎない。だから、ゴッセンがみずからの理論を“天文学におけるコペルニクス”に比すべきものと考えたのは、いささか行きすぎのように思われる。強いていうならばゴッセンは彼以前における限界効用価値理論の存在に不注意だったといえよう。したがって——もし限界効用理論の提唱を限界“革命”というなら——「1870年代の限界効用革命 (marginal utility revolution) の起源を解説しようという試みは失敗すべき運命にある。それは限界効用革命ではなく、突然たる変化でもなく、旧思想がけっして決定的には拒否されない単なる漸進的な変革 (only a gradual transformation) であって、またそれは1870年代に生じたものでもない³¹⁾」のである。限界“革命”など、もともと存在しなかった (M. ブローグ) といってもいい。

コペルニクスの天文学における発見は誰にとっても“革命”的发现であるが、ラボアジエの酸素の発見は化学者にとってだけ“革命”であった(早坂忠氏)。だからゴッセンが彼の再発見——じつは沢山の先駆者がいる——をコペルニクスの发现というのは、いささかムリである。やはり早い時期に新しいバッヂをつけた程度の人と考えるべきであろう。★

★ リヤンチェンコは、限界効用理論は単に古典派理論の継承であるだけでなくその反復にすぎない。経済学の根本問題——社会問題の解決——には、ちっとも役立っていないと述べている。(『経済学説史』邦訳241頁参照)

ではどういう先駆的業績があったのかというと、すでに16世紀半ばにおいて、イタリアでは効用を強調した価値論がすでにあった。イタリアは経済学の先進国なのである。この点について、イタリアの経済学者コッサ(Luigi Cossa)は「18世紀のイタリアの経済学者の断然たる“優勢”はまことに公然たる秘密だった」と明言しているほどであり、われわれはこの“公然たる秘密”に全く無関心であったということになる。たとえば“フィレンツェの硯学、ベルナルド・ダヴァンツィアーチ(Bernardo Davanziati, 1529~1606)は「主観的価値論の有力な先駆者」³²⁾であったし、フェルディナンド・ガリアーニ(Ferdinando Galiani, 1728~87)も「限界効用学派の1先駆者であることに異論の余地なき人物」³³⁾である。なぜならば彼は、すでに、価値が効用に左右されることを述べ、“効用とはわれわれを幸福にしてくれるものである”と効用を定義し、次いで“効用が所有する財の数量を異にして可変である”と述べているからである。ガリアーニは「価値はその商品の一定量のなかに凝固せる効用によって究極的に決定され、効用は人間の必要の強弱によって決定される」(コッサ)と定義している。★

★ のちに述べるチュルゴの理論は、このナポリのガリアーニに倣ったものであり、それが同時代のコンディヤックに伝承されていく。ガリアーニはまた、21歳にならないうちに『貨幣論』5巻（1750）を書いた天才でもある。

またニコラス・バーボン（N. Barbon）（余り認められなかった人ではあるが）もガリアーニとならんで「限界効用理論に先鞭をつけた人物」³⁴⁾である。ナポリのジェノヴェージ（Genovesi, l'abbé Antonio, 1712～1769）〔世界で最初に経済学講座を1754年11月5日開講した〕は『商学または市民経済学講義』（Lezioni di Commercio, o sia d'Economia Civile）の著者として知られているが、本書は「主観に触発されて書かれたもの」³⁵⁾で、ミラノの伯爵（ベッカリアの終生の知己）ピエトロ・ヴェリ（Verri, Pietro, 1728～1797）〔のちオーストリア軍の将校となる〕は「価格は商品の効用と商品の希少性との両者により説明される」³⁶⁾べきものとし、“経済学の問題は最小の労働を投じて年々の再生産額を最大にすることである”と述べている。彼の『経済的考察』（Meditations on Political Economy, 1771）は、18世紀イタリアにおける最上のものであるとコッサは絶賛しているが——、ここには「ゴッセンにいたって再び見出されることになる関心事の発想」³⁷⁾が明らかに認められる。

1751年に『諸観察』（Osservazioni）を公刊したポンパオ・ネリ（Pompeo, Neri）は“効用（有用性）をもって、あらゆる価値の基礎となす——だがしかし、すべての価値が、必ずしも効用に比例するものではない”と説き——「希少〔性〕が効用を凌駕するのでなければ、牛乳がダイヤモンドよりも、水がブドー酒よりも、鉄が金よりも、ずっと貴重なものになるであろうから、——希少〔性〕が効用を凌駕する」³⁸⁾ものだと述べ、早くも“希少性”を強調している。高名な僧侶だったジァムマリア・オルテス（Giammaria Ortes, 1713～1790）は「すべての職業が人間の欲望により判断され、かつまた限定されるものである以上、効用をぬきにして、その費

用や費用の要素などを述べることは不条理³⁹⁾であると述べた。ブスケーは「オルテスは限界効用理論の先駆者⁴⁰⁾」に数えられるべき人であると述べている。★

★ オルテスは人口問題を研究し、その増加を“幾何級数的”に数式化して説明している。マルサスの先駆者でもある。社会の富は人口と一定の比例をもち、人口は社会の富できまるという思想を抱いていた。

イタリアだけでも、上述のように、ゴッセンの先駆者がいた。

フランスではどうか。数理経済的理論はフランスにおいては無視され続けてきている。オーストリア学派の学者はほとんど何の影響も与えなかった。……フランスの経済学者がこの重要な1学説について「奇異にも正しからざる評価をなしていることは今なお事実⁴¹⁾」といわれている。カナール (Nicolas François Ganard 1755～1833) は価値について、“価値が投下労働以外の原因によること”を説いているが、ケネーの後継者チュルゴ (Anne Robert Jacques Turgot 1727～81) [1774～76年の間、ルイ16世治下のフランスの大蔵大臣の地位にあった] は前述のイタリアのフェルディナンド・ガリアーニにならって、心理学的主観価値を述べ、“賃金鉄則”を定式化した。同時代のコンディヤック (Etienne Bonnot de Condillac 1715～80) も価値は効用に因するものと説く。★ グラスラン (Jean Joseph Louis Graslin 1729～90) も欲望をもって価値の原因とした。ケネー (François Quesnay 1694～1774)★は無償効用と有償効用との区別を認め、ル・トロース (Guillaume François Le Trosne 1728～80) にいたっては、価値の原因を、第1に効用、第2に必要不可欠の費用、第3に財の供給状態、第4に消費者および販売に提供された財の競争によると述べている。

★ ケネーのばあい、“生産”ということは、“効用を創造すること”であった。

(E. James, ibid p.70)

- ★ コンディファックには限界効用理論に対する“特に多くのもの”が認められるとシュムペーターは付言している。(Schumpeter, Epochen der Dogmen und Methoden-geschichte, S. 113.)

オーギュスタン・クールノー (Augustin Antoine Cournot, 1801~77) は 1838年の『富の理論の数学的原理に関する研究』(Recherches sur les principes mathématiques de la théorie des richesses)で、数学的方法の導入の必要を説いている。ただしクールノーの死、[1877年3月31日、パリ.]の直前にジェヴォンズによって紹介されたのち、ようやく世間の注目を集めるにいたったものである。

クールノーは「経済問題を論ずるにあたり始めて数学を応用した。また経済学と数学について十分な知識をもった人」(イングラム)であった。ジェヴォンズは『経済学の理論』の第2版序文において、クールノーの限界効用学派の歴史上における“目覚ましき地位”について述べている。★

- ★ ゴッセンの著作よりも7年も前に、クールノーの著作が出ている。

フランスの民間の技師でありパリの道路・架橋の最高責任者でもあったデュピュイ (Deput Arsène Etienne Juvénal, 1804~66) は交換法則の発見と説明に数学的推論の方法を利用できるということを確信していた。需要の研究に当って、すべての財の効用はその量が増加するにしたがって逓減するということを彼は知っていた。だから彼も限界効用理論のすぐれた先駆者の1人である。

イギリスはどうか。

周知のようにベンサム (Jeremy Bentham, 1748~1832) は、社会観察に数理的方法を主張した最初の1人であり、彼の功利原則はこれらの作業の

総合であった。彼はゴッセンの“享樂逡減の法則”（欲望飽和）を明示的に定式化し、限界効用の観念を暗示している。またリチャード・ジェニングス（Richard Jennings, 1814～91）〔ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ〕は1855年の著書のなかで、限界効用を消費者行動の分析に使っているし、“感覚変化の法則（law of the variation of sensations）”という名称で限界効用逡減の法則を述べている。技師フリーミング・ジェンキン（Fleeming Jenkin 1833～85）は、ジェヴォンズより以前に、需要供給曲線の作図を行っているし、古典学派の価格法則を近代的なスタイルで描いている。伯爵ローダーデール（Lord Lauderdale, 1759～1839）は価値の根據としての効用に付されている重要性を強調する。すなわち“富とは効用を有するあらゆるものである。しかも個人的富は効用および希少性をもつ。これらの両要素が価値を決定する。これらのものは需要および供給において表現される。そしてそのいずれかの変更が価値に影響する”と述べ、有用な財の量を増加するとき、その交換価値が減少する事実に着目している。資本は一定の条件下では、資本投下において、ある限度——つまり限界marginがあることを暗示し、コンディヤックの効用概念にもふれている。国民所得の真の計算法および富の分配が生産上におよぼす影響などについても需要の弾力性を解析するに等しい方法で明らかにしている。アイルランドの理論家ロングフィールド（Longfield Samuel Mountifort, 1802～84）は、1833年の『経済学講義』（Lectures on Political Economy）には、限界効用理論の予示がみとめられる。彼は資本の単位が付加されるにつれて、資本単位あたりの生産性が減少すると説いているばかりか、需要側にもまた注意を向けて限界需要の理論を表明しているし、賃金論においても限界生産力説を予示している。ロイド（Lloyd, William Forster, 1795～1852）は、効用と交換価値の関係を説明するために、限界分析の適用をおこなった。彼は“全部効用”と“限界効用”を分ち、しかも価値は財の最初の増加量に対する欲望に比例することを明らかにした。これはシーニオアに受

けつがれていく。

シーニオア (Senior, Nassau William 1790~1864) は、古典学派の第2世代に属する経済学者のなかで、最も傑出した地位に立っている。彼は需要においては効用が、供給においては希少性が決定要因となると説く。彼は価値を構成するのは、決して労働ではなく希少性であるという。供給が希少であるということは、要するに、労働および制欲という2つの要素が希少であることに起因する。また効用が需要をつくるものなのである。ちょうど希少性が供給をつくるのと同じように——。彼の考えはローダーデール、ロングフィールド、チューネンらの生産性の理論と一致するが、シーニオアの場合、これらのだれよりも包括的に効用増加分の逡減という考えを展開している。しかも単に生産においてのみでなしに、消費における効用増加分の逡減をも取り扱っている。だからシーニオアは“こんにち純粹経済学とよばれるものの創立者のひとり” (ジイド) なのである。

ドイツではどうか。ドイツでは経済学の生きた地盤が欠けていた。だから経済学は“外来科学”であった。北ドイツの自分の所有地で、一生を農業家としておкуった孤独な思想家、ハインリッヒ・フォン・チューネン (Johann Heinrich von Thünen, 1783~1850) は1826年に名著『孤立国』 (Der isolierte Staat) を書いている。彼は経済現象を“変動的要素”と“不変的要素”に分け、この不変的要素を数学的に決定しようとした。つまり、農業が集約化されれば当然生産費は高まる。そうすると、それほど有利ではない場所でも利潤を伴って耕作できる。だから土地の耕作における最適の集約度 (the optimum intensiveness) というものは、その土地の肥沃度、あるいは市場への近さによって決定される。農業家の任務は、この最適点 (optimum point), すなわち、最大の地代 (maximum rent) を得るために土地の1単位に用いられねばならない労働単位の数 (the number of units of labor) を決めるということになる。この“立地問題” (Standortproblem) について、チューネンは“非現実的なロビンソン・クルー

ソーを仮設することなく”超歴史的な“純粹”妥当性のある法則 (ein Gesetz von überhistorischer “reiner” Geltung) を考え出している。⁴²⁾ 彼は彼の理論をさらに突っ込んで展開する。すなわち「労働または資本の1単位が追加されることによって生産が増加する分量は、労働または資本の総量が最適点をこえて増大するにつれて、小さくなる。この追加生産物は、追加された労働または資本の単位の特殊的な生産物である。結果における変化は、原因における変化に起因するものなのだから——。そしてこの、近代の用語をもっていえば、限界生産物 marginal product こそが、雇傭される労働または資本のあらゆる単位の所得を決定するのである。なぜならば、いかなる商品をとってみても、同質の単位の価格は、たった1つしかあり得ない。そうでなければ、高い価格を要求する単位は、安い単位によって取って代わられるであろうから。他方において、価格が、限界生産物の費用以上に上ることもなければ費用以下に下ることもあり得ない。もしある生産要素の最後の単位に対して生産者の支払う費用が、そのもたらすものより低いとするならば、もっと多くの単位が必要されることとなり、その価格は上るであろう。反対に、もしある要素の費用が、生産物にもたらすものよりも高いとするならば、その要素に対する需要は減少し、価格は低下するであろう。

これが、チューネンの法則である。利子と賃金率とは、資本および労働の限界生産性 marginal productivity によって決定される。この原則は実質上、40年後に出たジョン・ベイツ・クラーク John Bates Clark の学説と軌を同じくするものであって、近代の限界効用理論を所得分配の問題に論理的に適用したものにはかならずぬ⁴³⁾ ものであり、チューネンが限界効用理論の先駆者であることは間違いない事実である。場所〔位置〕の優劣による地代発生を述べた点で、理論経済学にたいする貢献があるばかりか、彼は土地収獲逓減の法則をハッキリ述べている。賃金にかんする有名な方式は、賃金は、労働者の欲望に労働生産物の価値を乗じたものの平方

根であり、 \sqrt{ap} である。彼はこの方式を尊重するあまり死後、墓石にそれを刻（きざ）むことを求めたと伝えられている。

チューネンは確かに、計量経済学、限界効用理論および“地域”研究の先駆者であったことになる。——してみると、ゴッセン以前に、英・仏・独・伊においても、限界効用理論を考えていた人が多数いるわけであるから、この歴史的事実をみ逃して、自己の創始した発想をいきなり“コペルニクスの発見”と自負した点が、ゾンバルトによって“天才的白痴”（*der geniale Idiot*）といわれるゆえんであろう。

なお山田雄三博士は『経済学説全集』9「近代経済学の生成、第1章、総説、第3節“先駆者たち”（昭和30年、河出書房、29～30頁）で先駆者たちの表〔ジェヴォンズの令息、ヘンリー・ジェヴォンズによって補充された『経済学の理論』（ジェヴォンズ）第4版の付録による〕を掲げておられるので、参照して戴きたいと思う。（小論では、紙幅の関係で止むなく割愛した）。

IV. 学派形成の理由

前節で明らかになったことはゴッセン以前に、英・仏・独・伊の諸国で、かくも多数の限界効用理論の“先駆者たち”がいたということである。またゴッセンがゾンバルトによって天才的白痴と酷評された“わけ”を知りえたことである。もうひとつ、限界革命の“革命”という概念じたいがすこぶる曖昧であるということである。限界効用理論は古典派経済学からキッパリ絶縁した新しい理論体系ではなかった。限界“革命”などといっても、限界効用理論は、古典派の市民的個人主義的伝統を継承しているものであって、いささか分析の方法を変えて、新しいバッヂをつけただけであることを知った。シュムペーターはハッキリと「限界原理自体は〔単なる〕分析の用具にすぎず……マルクスでさえ、もし50年も遅れて誕生した

なら、これ「限界効用理論のこと」を当然のものとして用いたに違いあるまい⁴⁴⁾と述べているくらいで、けっして限界効用学派が1学派としての特色をもつものではない——ということを知った。いわゆる限界革命は存在しなかった(M. ブローグ)のである。★

★ メンガーにしてもワルラス、ジェヴォンズにしても彼らの理論を“革命”などとはいっていない。

とすると、近代経済学誕生の問題——つまりオーストリアのメンガー(C. Menger, 1840~1921)が、その著『国民経済学原理』(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1871)において、イギリスのジェヴォンズ(W. S. Jevons 1835~1882)が、その著『経済学の理論』(The theory of political economy, 1871)において、またスイスのワルラス(L. Walras, 1834~1910)が、その著『純粹経済学要論』(Éléments d'économie politique pure, 1874~77)において、ほとんど時を同じくして、しかも、おのおの独立に、期せずして、いわゆる“限界効用”に相当する概念の上に、経済学の理論体系をつくりあげた時、近代経済学は生れたという問題——“時を同じく”して、“国を異に”して、“期せず”して、近代経済学が生れたのは“なぜ”かという問題と、もう1つ、彼らとゴッセンの発見(著作)とどういう関係(連続性)があるかという問題が出てくる。なぜ1870年代の初頭になって、“時を同じく”して、“国を異に”して、“期せず”して、おのおの独立に生まれたのであろうか。M. ブローグのいうように「マンチェスター、ウィーン、ローザンヌのように甚しく相へだたる知的風土で、ほとんど同時期に活躍した3人の人物が、同一の概念にたまたま出会うことができたとは信じがたい⁴⁵⁾」し、イギリス、オーストリア、スイスの経済発展の水準がそれぞれ違うばかりか「イギリス哲学の功利主義的経験主義的伝統(the utilitarian-empiricist tradition)、オーストリアの

新カント哲学的風土 (the neo-Kantian philosophical climate), スイスのデカルト哲学的風土 (the Cartesian philosophical climate) は経済学に効用革命を惹き起こすことができるほど, “共通の要素” を実際に備えていたわけではなかった⁴⁶⁾」からである。ではなぜ1870年の初頭において国籍を異にするジェヴォンズ, メンガー, ワルラスのトリオ (3人組) が限界効用理論をほぼ同時に, しかも完全に独立して発表しえたのか。彼らは秘かにゴッセンの著作を知っていたのではないかという疑問がでてくる。(しかし, 第1節でわかったようにジェヴォンズにこの形跡は全くなく, メンガー, ワルラスについてもこのような形跡は全くない)。

こういう事例〔“国を異に” し, “時を同じく” した発見〕はふつう経済学史上の多発的発見 (multiple discoveries) とよばれ, この事例は「多発的発見の最良の事例の1つ⁴⁷⁾」とM. ブローグは述べているが, ではなぜこのような多発的発見が, 1870年代の初頭に起ったのか。ジェヴォンズ, メンガー, ワルラスのトリオが偶然の一致とはいえ, 同じような著作を僅か3年以内の間に, 次ぎ次ぎと公刊したという事実は偶然の一致と考えるにしては納得しえないものがある。

では3者に共通した歴史的視点から分析して考えてみよう。M. ブローグは「1)経済学の修練の内側での自律的展開, 2)哲学的潮流の産物, 3)経済界における一定の制度的変化の産物, 4)社会主義とくにマルクス主義への逆風⁴⁸⁾」の4つに分類して, このうち1)が最も真実らしい (plausible) もので, 一般に支持されているものだ, と述べている。(ただし, 限界効用理論の同時発見は解説を必要とする課題なのだが, 利用できる解説のどれもこれも納得しがたい——と断っている)。

まず1)について考えてみよう。西欧の1850年から70年代の半ばにいたる時代は, 一般的にみて繁栄の時代であった。とくにイギリスの富は, 70年代の初めには“盃に溢れるばかり” であった。★

★ イギリスでは1868年の金融恐慌のあと不況が2カ年あったが、1870年から1873年までは大繁栄時代が続いている。

産業革命の結果として、まず“豊富な商品の山”を積み上げていったし、次いで輸送方法の改善（たとえば農村から都市へ大量の食料が搬ばれることが容易となる）をもたらしていった。しかし「この繁栄の時代でも大部分の労働者の賃金は依然として低く、70年代の初めまで購買力に換算して、全般的に賃金上昇はみられなかった⁴⁹⁾」のである。つまり商品は産業革命の結果、増大したのに賃金上昇はみられないとすると、何をいかに購ったらいのかという消費者中心の考え方が、これまでの生産中心の考え方に代わらなければならない——ということは当然のことである。

思想的にいうと、“ヨーロッパ近代史のうえで、1848年につぐ転換期は、1870年であった……資本主義はほぼこの時期から、独占の段階にはいる”ことになるが、そうすると、消費者個人の立場からみる経済理論が必要になることは誰しも認めるであろう。というのは従来の古典派の価値理論は生産費説（労働価値説）であったが、生産費説では独占価格の説明は困難であり、“生産費で価値が決定される”という公準が独占価格には適用できないからである。とすると、消費者が財について“選択する可能性”をもつ新しい経済理論が必要となる。消費者がその欲望充足から生まれる満足感に還元する経済理論が必要になってくるであろう。ということは、この学派の3人の創始者の共通の見解を考えてみれば容易にわかることである。つまり、彼らか経済現象の説明において、生産の側面から出発することをやめ、その代わりに消費や欲望の側面から出発していること、および客観的な経済過程を究極的には主観的な要素に、すなわち消費者がその欲望充足から生ずる満足度に帰せしめる発想からみて明らかであろう。

その場合、経済問題の中心は消費の最適——消費者の欲望充足（＝効用

度)を極大にするという意味での最適——の諸条件の探究という意味をもつ。エリック・ロールは限界効用理論を要約して“金利生活者階級の経済学”(economics of the rentier class)⁵⁰⁾〔つまり与えられた一定額の所得から“利札を切る”(clipping coupons)ことによって暮しをたてている階級の人びとの経済学,生産過程への参加でなく,所得の処分で生活している人びとの経済学〕だと巧く表現しているが——家計の理論となると「各1ドルが購入しうる限界効用が等しいように消費者が自己の与えられた所得を配分するときに最適状態がえられる。限界効用逓減の法則が,そのような最適状態が存在することを保証する〔のだ〕⁵¹⁾」という発想は当然でてくる。これは経済学〔理論〕の自律的な知的展開の結果,知りえたものであるから,1)経済学の修練の内側での自律的な知的展開(an autonomous intellectual development within the discipline of economics)と考えられよう。

ただし,この考え方は限界効用理論が古典学派の理論と本質的には違ってはいないという考えかたであり,限界効用理論の理論上の“内面的歯車装置”(inneres Räderwerk)も古典派のそれも同じとみる考え方から説明できるものである。

2)の哲学的潮流の産物(the product of philosophical currents)について考えてみよう。まずイギリスであるが——この時代の支配的な哲学は“自助”(Self-Help)の哲学であった。ヴィクトリア時代(在位1837~1901)にイギリス資本主義は成年に達した。イギリスは19世紀の中頃から70年代の半ばにいたる資本主義の黄金時代——国内と海外の市場を急速に拡張しながら前進していく国民的繁栄の時期——を迎えた。イギリスは収穫の時期に入っていたのだ。「“自助”がヴィクトリア時代の主要な徳目のなかに地位を占めていた。まさかの日に備えて貯えておくことは,道德学者と経済学者が命令し,職人と商人もまた完全に承認した義務⁵²⁾」であった。“冷静な商人根性”がイギリス人のあいだに浸透していった。限界効用理論は,こ

の“自助”の哲学（ヴィクトリア時代の支配哲学）のもとに誕生したという考え方である。この考え方は、ジェヴォンズの思想形成のうえで影響を与えたところがあると思われる。しかし、メンガー、ワルラスとは関係がない。したがってトリオによる限界効用理論の同時発見の説明としては“共通の要素”に欠ける。

デカルト哲学ではどうか。デカルト（Descartes, 1596～1650）が近代哲学の父であることは誰しも異論はない。フランス人デカルトは近代自然科学の確立に続いて、近世哲学史の扉を開いた大哲学者である。デカルトを特徴づけるものは、幾何学的、分析的方法であった。彼は幾何学と数学は方法的認識の模範だとした。★

★ デカルトの数学上の業績は、主として解析幾何学と座標幾何学の発明であった。

デカルトが“幾何学”（géométrie）のなかで提出した数学上の方法は、じっさいは代数学（algèbre）であった。その理由は、論理が単純で明晰であるからである。またデカルトは“主観主義”（subjectivisme）なるがゆえに近代的といわれるのだし、デカルト以来、われわれは「客体に対する主体の、外に対する内の、存在に対する意識の、超越に対する内在の優位⁵³⁾」を主張できるようになった。さらにデカルトには感性知覚の意義とくに正しい“方法”を問題とする近代認識論の形成があった。そうすると、17世紀後半以降、ずっと西欧思想界を支配していたデカルト哲学からの影響によるものではないのか——という考え方ができよう。しかしイギリスは哲学においては“ヨーロッパ的コンサート”（das europäische Konzert）のなかで独自の音調★をもち続けたのだし、ジェヴォンズやワルラス、メンガーの同時発見の理由の説明としては“共通の要素”がないので説得力に乏しい。

★ イギリスでは、ニュートンの“哲学の規則”(Regulae philosophandi)の方法をとって哲学の新しい方向に進んでいく。

ワルラスはクールノーやデュピュイから受けた数学的方法と父親のaugust・ワルラス(A. Walras)の効用理論に影響されていると考えた方が納得できる。★

★ ワルラスは、みづから「私は父オーギュスト・ワルラスに自分の経済学説の根本原理を負い、またオーギュスタン・クールノーにこの学説の展開のため函数計算を用いることの原理を負っている」——と述べている。

では、新カント派哲学の影響についてはどうか。ドイツでは、1850年代の終りと60年代の初めにおいて、自然科学的唯物論の流行に対する反動として“カントに帰れ”(Zurück auf Kant!)の叫びがあがってきた。つまり「フィヒテ、シェリングおよびヘーゲルらの思弁的諸体系が明らかに崩壊した。いまこそ“科学のつつましい原則へ(auf die schlichten Grundsätze ernster Wissenschaft)”帰る時がきたことを証明したのだ。(この原則とは80年前、イマヌエル・カントによって宣告されたもので、それ以後の哲学的発展がなおざりにしていたものである)。そこで1850年代の終りと60年代の初めにおいて、種々の方面からカントに帰れ!の叫びがあが⁵⁴⁾て」きた。リープマン(Otto Liebmann)のごときは『カントと亜流』(Kant und die Epigonen, 1865)で、各章ごとに、“さればカントに帰らねばならぬ”(Also muss auf Kant zurück gegangen werden!)というリフレイン〔繰返えし〕で結んで、当時の哲学的傾向に力強い表現力を与えた。マルクス主義の経済学説や階級史観から唯物論を取り去ってそれを批判主義と倫理的 innerlichkeit によって基礎づけようとしたのである。★

★ ランゲ (F. A. Lange 1828~75) は有名な『唯物論史』を書く。彼はカントの世界観こそ、現代の標語 (das Schibboleth der Gegenwart) であり、将来の警句 (die Losung der Zukunft) であるといい、先験的観念論 (der tranzendente Idealismus) は唯物論を征服し、唯物論に止めを刺すと述べている。(F. A. Lange, Geschichte der Materialismus [1] 1921, "Biographisches Vorwort" 参照)

しかし「19世紀半ば近くにドイツで始まって、ついでヨーロッパ大陸全体を席捲したカント哲学の復興に、何人かの著者たちは刺激されていた。“内的考察と感性的印象に帰れ” (Back to introspection and sense-impression) がこの哲学的傾向の標語であった。しかし、メンガー自身がこの哲学的傾向に心を動かされたという証拠はないし、ワルラスの場合をとってみても当代の哲学論争に学問的興味を寄せたしるしは全くない⁵⁵⁾」とブローグは断言している。同時発見を完全に偶発的な知力の結果と考える証拠としては“共通の要素”に欠けていて解明には不十分である。要するに、第2)の哲学的潮流の産物という考え方では説明がつかない。

では第3)の経済界における一定の制度的変化の産物 (the product of definite institutional changes in the economy) と考えたらどうか。資本主義経済秩序 (体制) というものは、産業革命の結果、人間によって作り出されたものである。「産業革命が全速力で進行するにつれて、それによって生産の問題の解決は可能となったが、同時に深刻な社会問題がおこらずにはいなかった。…… 社会危機に伴ってあらわれてきたのは、経済的な危機、[つまり] 恐慌であって、恐慌は1817年以降、周期的に反覆する資本主義の1つの特徴⁵⁶⁾」となっていたことは周知のとおりである。加うるに、歴史学派の伝統にしたがって、イギリス古典学派の世界主義や交換価値の“優位”が批判されていくばかりか、ドグマ化した古典学派の教理そのものが社会主義学派によって批判を受けるようになる。これらの事

情がからみ合って1870年を転期として経済理論上の分析の変革をもたらした——という解釈が生れる。しかし、イギリス、フランス、オーストリアでは、経済発展の段階が違う。だからこれらの国籍を異にしたトリオが、なぜ“時を同じく”して、“期せず”して、ほぼ同じような考え方をもつにいたったのか、という説明としては不十分である。つまり資本主義の後進国オーストリアで先進国イギリスとほぼ同時期に限界効用理論が生れたことに対する説明としては“共通の要素”に欠けるから説得力に乏しい。

では、第4)社会主義とくにマルクス主義への逆風 (a counterblast to socialism particularly to Marxism) として考えてみよう。確かに、ゾンバルトは「限界効用学説は社会主義への不安より産出されたものだ」⁵⁷⁾と断定している。また限界効用理論の成立の理由について「資本主義の成熟にともなう労働者階級の階級的結成と、それを基礎とした社会主義経済学の台頭に求めらるべきであろう。……古典派経済学も歴史派経済学も全くあるいは殆んど無力であった〔から〕である。……これに対抗しうるような新しいブルジョア理論が樹立されねばならない。これは19世紀の6.70年代におけるヨーロッパ資本主義の普遍的要請」⁵⁸⁾だったのだと説く人も少くない。しかし詳しく調べてみると、限界効用理論はマルキシズムのアンチ・テーゼとして出てきたものではないようである。M. ブローグはいう——「限界効用理論はマルクス主義へのブルジョア的回答にほかならなかったという主張がある。だが、ここでは少なくとも、次の点はまったく確定可能である。『資本論』第1巻は1867年に現われたが〔20年後の〕1887年までは英語に訳されることがなかった。ジェヴォンズの『予告』(Notice)は1862年に書かれ、1863年に出版されたが、それは彼が限界効用理論だけでなく資本の限界生産力理論さえも完全に所有していたことを示している。マーシャルは1867年に研究を開始したが、1872年に執筆されたジェヴォンズの著書への書評には、彼の理論体系の輪郭がすでにうかがわれる。ジェヴォンズ、マーシャル、メンガー、ワルラスらはいずれもそ

の体系形成期に、1883年にひっそりと死ぬマルクスの名を一度も耳にしなかった。……新らしい伝統にたつ経済学者たちの最初の世代は、マルクス主義についてはもとより、社会主義思想についての知識をもちあわせなかった⁵⁹⁾——のだと。また玉井氏は「労働運動や社会運動は19世紀に入り、次第に活発になった〔ことは事実〕である。しかし、これらの運動にマルクス主義が大きな支配力をもつようになったのは、主として1880年代である。そこで直接、マルクス主義攻撃を展開したのは、パレート、ボーム＝バヴェルク、ウィックスティード、ウィーザーらの第2世代の近代経済学者たちである。いずれにせよ、限界効用学派は、むしろ歴史主義に対する理論的批判と、体制全体の変化、とくに資本主義の世界資本主義化という歴史的変化に対応している事実を認識することが重要であった。それにもかかわらず、第1世代のトリオは、いずれも経済理論としては、これらの歴史的条件から抽象化された演繹ないし理念化を徹底化させた……メンガーを創始者とするオーストリア学派の場合は、政治思想上は保守的であり、自由放任主義の忠実な使徒であり、反社会主義的であった。少なくともメンガーの限界効用理論の形成に関するかぎり、マルクス主義への攻撃的意図を見ることは不可能である⁶⁰⁾」と述べている。要するに主観的経済学の諸傾向の発現はマルクスの「資本論」の公刊に対する“直接的な反応”ではなさそう（マーチャーシュ Mátyás. A）ということがわかる。

してみると、第4)の“社会主義とくにマルクス主義への逆風”と考えても解明不十分であることがわかる。

もう1つ。“主観的価値論はカトリック文化の産物であり、労働価値論はプロテスタント的世界観からの自然的流出である”という説明がある。この説明によると、18世紀のフランスやイタリア経済学における効用理論の普及と、イギリスやドイツにおける効用理論受容の遅れが巧く説明できる。だが、19世紀の先駆者を個別にみていくと、けっしてこの大雑把な分

類にしたがっていない。小論の主人公のゴッセンは主観的価値論のまっさきに挙げられる先駆者であるが、“名うての反カトック”であったから。

以上、限界効用理論の形成のわけを吟味してみたが、“どれもこれも十分には納得しがたい”——というほかはないことがわかる。

なぜであろうか。筆者は前記の解説のなかに、人口学的解説がぬけていることに気付いた。そこで筆者は人口思想史の立場から、この問題を取り上げ解説してみることにした。

V. 人口思想史的解明

前節では、限界効用理論形成の同時成立の理由について、さまざまな視点から検討を加えてみた。しかし“限界効用理論の同時発見は——解説を必要とするにもかかわらず——利用しうる解説のすべてが納得しがたい”（M. ブローグ）ことを知った。ここで1つ奇異に思えたことは、これまでの解説のなかには、人口史からみた解説がまったく行われていないということである。果してその必要がないものだろうか。筆者は人口学的解明が、トリオによる限界効用学説“同時成立”の謎の解明に必要であると思う。

確かにジェヴォンズは『経済学の理論』の第8章「結論」（concluding remarks）の“人口論”（the Doctrine of Population）のなかで次のように述べてはいる。すなわち「人口論については全く1言も費すところかなかった。それは予が人口論の真理とその広汎な重要性とを些少とも疑っているからではなく、それが経済学の直接の問題に含まれていないからである。……人口を一定として、われわれは彼らの自由なる土地と資本が増加または減少するものと考えることができ、次にもとの土地と資本のもとで、人口が減少または増加するものとして、これに幾多の点でそれぞれ適用しうるがごとき結果を導き出すこともできるであろう⁶¹⁾」と。ジェヴォ

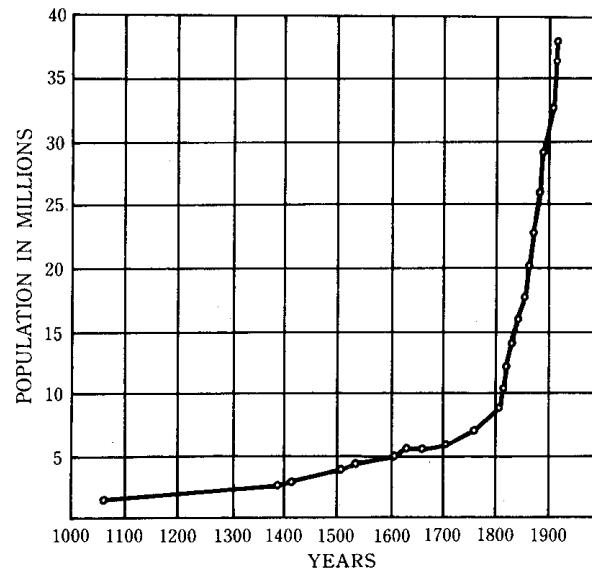
ンズ的な“没人口の体系”の樹立以来「人口論への関心の復活をはかったケインズ経済学の成立を1930年代とするならば、この間およそ半世紀という長い空白が経済的立場からの人口論に生じたことを印象」⁶²⁾づける。しかし、筆者がとりあげて問題にしていることは、そういうことではなくて——トリオによる限界効用理論の同時発見の説明に、人口学的解明を適用してみてもはどうだろうかということなのである。

まず当時の人口事情が問題となろう。周知のアシュトン (T. S. Ashton) の『産業革命』(The Industrial Revolution 1760~1830) によると「葬式や洗礼式 (burials and christenings) の数字にもとづいた周到な計算によると、イングランドおよびウェイルズの人口は1700年において約150万、1750年には650万であったのに、1801年の最初のセンサス★が行われた時には、それは約900万であり、1831年までには1,400万に達した。このように人口は18世紀の後半に40パーセント、19世紀の最初の30年間には50パーセント以上増加した。大英帝国についてみれば、この数字は1801年には1,100万、1831年には1,650万であった」⁶³⁾と述べている。

★ 近代的センサス (census) が施行されるようになったのは、最も早い西ヨーロッパ諸国でも18世紀後半から19世紀になってからである。アメリカの1790年が最も早く、イギリス1801年、ドイツ1871年 (ただし関税同盟に加入している諸連邦では1834年)、スイス1837年、フランス1801年、日本1920年となっている。

イギリス産業革命進行の時期から19世紀末までの物凄い人口増加は筆者がクドクドしく説明するより次図の1800年から1900年の間の人口増加の物凄い“立ち上りカーブ”をみれば一目瞭然である (次図参照)⁶⁴⁾ また、1850年~1900年の間に工業化の進んだ西欧諸国では——フランスを除いて——1.5倍以上の人口増大が認められるのである。この物凄い人口増加は

図1 POPULATION OF ENGLAND & WALES

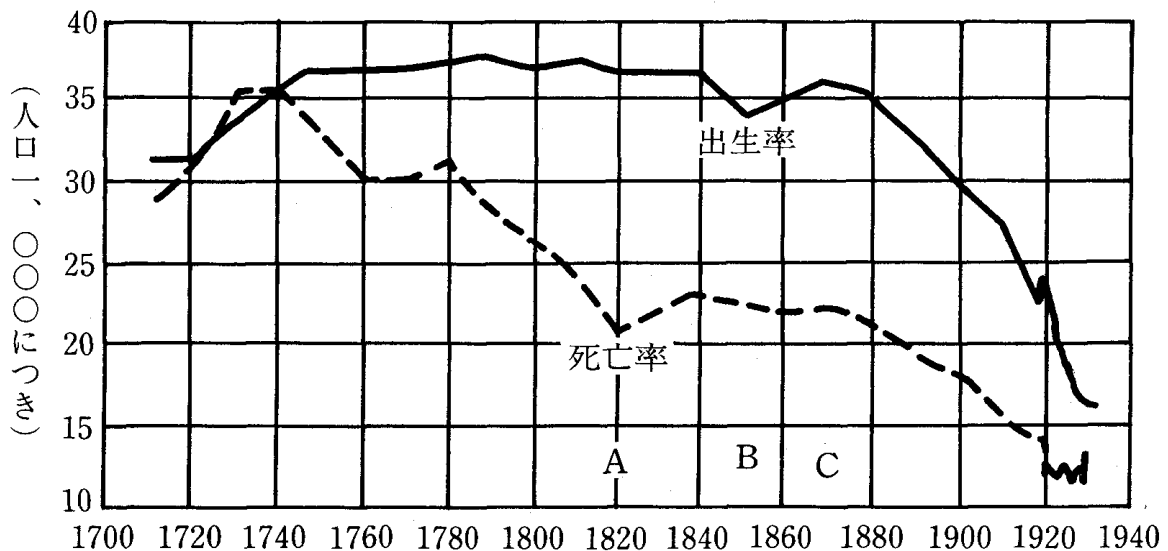


出所：Francis Place, ibid. P. 352.

——アシュトンはいう——「英国だけではなく、産業革命のような性質の事柄が全然起らなかった西欧および北欧の他の大抵の国でも急激に増加した⁶⁵⁾」と。つまり、図ではイングランド・ウェールズの人口となっているが、この人口増加は——フランスを除いて——西欧諸国に一樣に妥当するものなのである。この“物凄い人口増加”の理由については、ここで述べる紙幅の余裕がないが——一言でいえば、人口増加へ導いたものは公衆衛生の進歩による死亡率の減少であり、多産少死というパターンをとったということであった。「1812年から1821年にいたる10年間、死亡率は、殆んど継続的に低落した。死にいたることを少なくするうえに種々なる影響力が働いていた。根菜類 (root crops) [ニンジン、カブ、大根、芋類のごときもの] の導入によって、冬季にヨリ多くの家畜を飼養することができるようになり、したがってまた1年中を通じて新鮮な肉を供給することが可能になった。小麦が劣等な穀物にとって代ったことや、野菜の消費量が増大したことが、病気に対する抵抗力を強化した。石鹼や安価な木綿製下着の普及にともなう清潔度 (cleanliness) の向上が、病気感染の危険性を減少せしめた。家屋の壁には木材の代りに煉瓦が、屋根には草ぶき屋根 (thatch)

の代りに、スレートや石が用いられるようになって、悪疫の数は減少し、また製造工業の有害な諸工程が生産者の家庭から除去されて、家庭内の快適度が増大した。比較的大きな都市は舗装され、排水され、きれいな水流を供給された。医薬や外科手術に関する知識が発達し、病院や薬局（店）が増加し、塵芥処理や死体の適切な埋葬のような事柄にもヨリ多くの注意が払われるようになって」⁶⁶⁾死亡率の大巾な減少となっていたものである。念のため、当時の出生率と死亡率の状態を図示すると下図のごとく⁶⁷⁾なっている。

図2 イングランド・ウェールズの出生率と死亡率



出所：南亮三郎. 1972. P. 19.

もういちど確認しておく——1)「イングランド・ウェールズの経過が——経済構造を若干異にしたフランス1国を特別な例外として——北西ヨーロッパ先進諸国にほとんどまったく類同の形であらわれたという事実である……マッケンロートがこういう経過を示した国々を一括して北西ヨーロッパ集団と名づけ、そしてその国々にあらわれた如上の人口運動のあり方を“ヨーロッパ的人口様式”とよんでいるのは、けっして理由なきことではない」⁶⁸⁾ということである。もう1つは、2)死亡率の低下のため多産少死型であったということである。

以上のような死亡率，出生率の変動は，人口転換 demographic transition あるいは人口革命 demographic revolution とよばれる現象を生み出す。

この人口転換という歴史的事実こそ限界効用理論の“同時発見”の謎をとく鍵をもつものではなかろうか。というのは前図2（イングランド・ウェールズの出生率と死亡率）をヨク見ていくと，死亡率は1740年頃から漸次下り始めて1820年には，いったん激しく低下し〔図2のA点〕，次にまた少しく上り始めるが，1870年頃から急速に低下していく〔図2. B～C〕

次に，出生率であるが，——出生率は1850年頃チョット低下する〔図2のB点〕が，再び上昇し，1870年頃いったんピークに達し，その後，猛然たる下降を始めている〔図2のB点～C点〕。

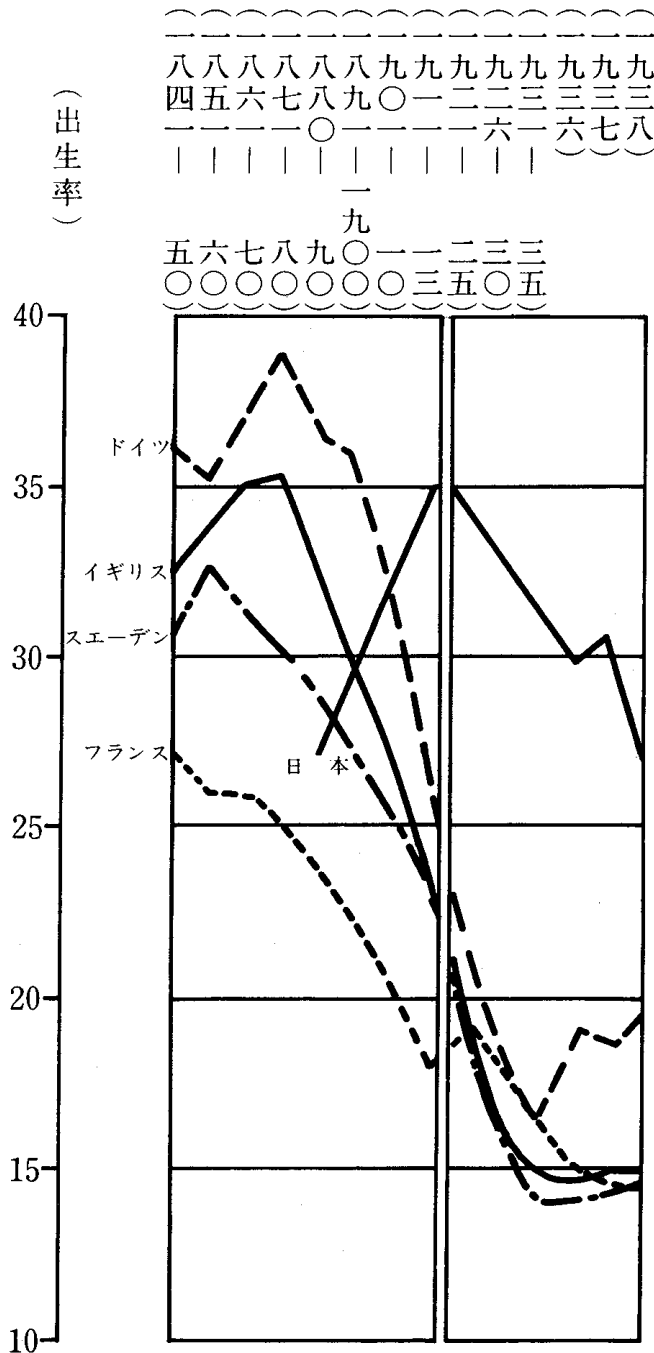
筆者が言いたいのは，この1870年の人口史上の位置である。俊敏なトリオ（メンガー，ワルラス，ジェヴォンズ）が人口転換を察知せぬ訳がないからである。

本節（V）の課題は1871年という“同時発見”の時期が問題であったが，（ワルラスだけは戦争という特種事情があって少し遅れるが，これはあとで述べる），筆者がクドクドしく述べるより，次図^{6 9)}3 出生率の低下状況（いつ頃から起っているか）を見れば一目瞭然である。敏感なトリオがこの人口転換★を見逃すとは到底考えられない。

★ 人口が成長過程を続けつつ，死亡率が大幅に低下し，さらに出生率も低下し（少産少死），生活水準の向上を結果する。これを人口転換または人口革命という。

さて，ここで少しく整理して考えてみよう。(i)近代化が始まると，まず死亡率が確実に低下していった，人口増加が急速になったこと。経済的工業化過程は死亡率克服過程であったこと。つまり近代化とともに多産多死

図 3



出所：南亮三郎，1972. P. 224.

必要を感じたこと。

型から多産少死型に変わったこと。(ii)死亡率の低下により，出生率と死亡率の高位均衡は当然失われて，乳幼児死亡数は減少し平均寿命の延長となり，この結果さらに生活水準の向上を結果したこと。(i)とところが出生率も図3のごとく，1871年をピークに急速に低下し始め（ただしイギリスはもう少し以前に，スウェーデンは可なり前から），多産少死から少産少死への転換が起ってきているということである。（人口転換の始期については，さまざまな説があるが，ここではふれない。ただ1870年の人口史上の位置をとりあげる）。(ii)ジェヴォンズ，メンガー，ワルラスらは古典派の理論（とくにマルサスの人口原理）に深い関心をもっていたこと。★伝統的家族から合理的家族への転換の現実を経済学的に表現する

★ たとえばジェヴォンズはいわゆる“公理”としての人口理論を放棄した。これはイギリス経済学の伝統に対する1つの抗議ではあったが、ジェヴォンズは人口理論の“真理と重大な意義を少しも疑うためではない”と断っている。(南『人口学総論』264頁) ワルラスの流れを汲むイタリアのエンリーコ・バローネ (Enrico Barone) の体系中には人口理論が綿密に説かれていて、バローネは経済的人口論の“限界”を表明している。(同, 289頁)

この(i)~(ii)を統合すれば、1870年代初頭における限界効用理論の同時発見の謎がとけるのではあるまいか。天才的なトリオが図2で明示したような、1870年代初頭の人口転換の現状をハッキリと、しかも素速く的確に表現(著作)したためであろう。

子供をもつことによる追加的費用は工業化の進展とともに急速に増大するものであり、加うるに、所得水準が上昇して婦人の地位が高まってくると、子供数の増加とともに養育に関する費用も累進的に増大する。これだけ費用負担が増大していくと、財の購入に当って“古典派の体系には欠けていた根本的な価格理論 (eine gründliche Preistheorie)” (シュムペーター) がどうしても見直さざるをえなくなる。また子供の出生を人為的に抑制しようとする傾向が出てくる。これらは生活水準の向上にともなう社会経済上の影響であろうが(生活水準向上→乳幼児死亡数激減→人為的抑制)、人口史的にいうと、この時期が1870年であったと考えられる。だからメンガーもジェヴォンズも1871年に限界効用理論を1871年に“国を異に”して、“時を異じく”して発表したのであろう。

ではワルラスだけが3年遅れたのは何故か。それはワルラスの特種な個人的事情があるからである。というのはワルラスがローザンヌに着任したのは1870年12月16日であり、彼の36歳の誕生日であった。時は普仏戦争が7月19日の対普宣戦によって開始された直後であり、「ナポレオン3世の最初の勝算にもかかわらず、フランス軍はワイゼンベルグ、ウェルトその

他いたるところの戦場で連敗し、プロシア軍は破竹の猛勢をもってパリへ進んでいた。20歳から40歳までの成年男子〔ワルラスは36歳!〕にはつぎつぎに動員令が発せられた。レオン〔ワルラス〕の身边にもその危険が刻々に迫ってくるようにおもわれた⁷⁰⁾」時期であったからである。1870年の暮れに着任したワルラスが1871年に大書を出版できるわけがない。やはり戦争が終って召集の心配がなくなってから書くのが当然であり——とするとワルラスが3年遅れたのは戦争による個人的事情と考えれば説明できよう。

ではなぜゴッセンが『人間交通の法則』を1854年に早くも公刊したのか。これは図2と図3のドイツの出生率をみれば容易にわかる。図2でわかるように死亡率がグンと低下したのは1820年頃である。(図2のA)。しかし出生率も下り、死亡率も低下したいちばん始めは1840年頃である(図2のB、図3のドイツをみよ) またドイツの出生率が1851~60年の間に急速に低下していることもわかる(図3)。つまりドイツはこの時期に少産少死への道(人口転換の端緒)を歩みはじめたのであり、ゴッセンの『人間交通の法則』は、この人口事情の敏感な反映と考えられる。ゴッセンの思想を特徴づけるa)功利主義 b)消費的接近 c)数学的方法の意味もこうして彼の主知主義と考えれば理解可能である。

また人口事情がイギリス、スイス、オーストリアに“共通”していたのだし、1840~50年頃(ゴッセンが気付いた頃)出生した女子は70年には婚姻年齢に達していたはずだから、この少産少死の傾向は顕著にわかったはずである。とすれば筆者の人口史からみた解説の方がヨリ説得的と思われる。要するに、筆者は人口転換を根拠として、ジェヴォンズ、メンガー、ワルラスのトリオによる1870年代初頭における限界効用理論の同時“発見の謎”を解明した方がヨリ説得力をもつと提唱したい。

Ⅵ. 批判

前節では“限界効用理論の同時発見は解説を必要とするであろうのに、利用できる解説のすべてが納得しがたい”(M. ブローグ)というこれまでの解説に対して筆者は、人口史からみた新しい解釈が考えられうると提案した。しかも、この解明方法の方が、“共通の要素”をもつからヨリ説得的ではあるまいかと述べたつもりである。

そこで、ゴッセンの定式化した法則と没人口学体系たる限界効用理論に対する批判の問題がでてくる。(これらは順を追って述べる)。

まずゴッセンの第2法則をとりあげてみよう。ゴッセンは第2法則として“諸種の享樂について、選択はできるが、それらすべてを享樂できるだけの時間がないばあい——最大級の享樂をえようとすれば、おのおのの享樂の1部分づつを(部分的に)、次のような割合で享樂すべきである。つまり、おのおのの享樂の大きさが、その享樂を止める時点〔終止時点〕で、すべて均等であるように享樂すべきである”——と述べていたが、この法則(というより要請)は数学的には正しいかも知れない。しかし実行問題として考えてみると、合理的に欲望充足のためこの原則を援用しようとしても、すこぶる困難であろう。誰しも、財の消費をどこまでやれば、すべての場合と同じ程度の満足がえられるかどうかわからない。その満足がゼロとなる場合だけは理解できるけれども、それでは無制限に欲望の満足を認めたばあいにのみ許されることだから——そうすると第2法則は無意味となってしまう。

さらに、財には“付加的満足”(Zusatzgenüsse)というものがある。確かに食物は飢えを医やす。パンにしてもライスカレーにしてもウナギ丼にしても飢えを鎮める効用をもつことは認める。しかしこれらの食物は飢えを鎮める以外に、味覚の満足やら嗅覚の満足を与えるものである。しかもこれらの効果はハッキリ区別できるものではない。とすると、これらの付

加的満足の充足を考えた場合、どうして第 x 番目の食物が限界効用をもつと断定しうるであろうか。(飢えは医やされても味覚や嗅覚まですべて充足したとはいえない)。

またある人が一定の貨幣額によって風味の違った 5 種の食物を択んだとした場合——よほど聡明で理性的な人なら、5 種類の食物を食べて結局満腹するようにすることができるかも知れない。しかし、このことはおのこの食物から均等の限界効用をえたことにはならない。思慮深い人で、彼の所得に応じて理性にしたがって、選択が許される場合を考えてみても、最も不必要なものから次ぎ次ぎに抑えていって欲望の最大充足を求める(全部享樂を極大に達せしめる)ということは、現実生活において著るしく実施困難なところがあることを感ぜざるをえない。★

また数学的方法による数量論 (Mengenlehre) というものは、1 つの表現ではあるが——それ以上のものではなく——科学的認識の基礎とはなりえないものである。数学的方法は経済学的分析の 1 つの方法であり、——確かに価格メカニズムの説明上欠くべからざるものではあっても——限界効用理論は「けっして“客観的”理論 (die “objektive” Theorie) とはなりえない⁷¹⁾」ものであり、この数学的方法は、その高度の抽象性のために、往々にして人を瞞着せしめるものである。繰返していうが、まさしくザリーンのいうように、限界効用理論は「経済学のなかの 1 つの叙述様式 (eine andere Darstellungsweise innerhalb der Ökonomik) にすぎず、けっして原理的に新たな結果に到達することはできない⁷²⁾」ものなのである。われわれはむしろ“限界効用理論そのものの限界”を今こそハッキリ認識する必要があるというべきであろう。

- ★ ブレンターノのように生活水準の向上によって、繁殖の享樂は飽和して次の享樂 (スポーツ, 詩歌, 音楽等々) に向うから、その結果、出生率は減少すると説く人もいるが、スポーツ, 音楽, 詩歌といえども奥行の深いものであり、ど

こで享楽を切上げるべきか仲々むづかしいといわねばならない。

なお限界効用理論そのものについては多数の権威者による批判があるが、小論では紙幅の関係で割愛する。

結び

小論では、H. H. ゴッセンについて、その生涯、理論（ゴッセンの法則）とその批判について述べ、ゴッセンを解説した。ゴッセンは限界効用理論のすぐれた先駆者のひとりであったが、じつはゴッセン以前にも英・仏・独・伊その他の諸国で類似の説を提唱したものが少なからずいた。したがって、ゴッセンの発見は単なる再発見であり、彼が、“コペルニクスの発見”と自負したことは——この孤独にして薄幸な作者の——気の毒ではあるが——早合点であり、そのため彼が“天才的白痴”（ゾンバルト）と酷評された理由が明らかになった。

またゴッセンについて述べる場合には、必然的に1870年初頭における限界効用理論の著名なトリオ（ジェヴォンズ，メンガー，ワルラス）による“同時発見”の理由について言及する必要が起ってくる。（ゴッセンは彼らより、約20年も前に類似した説を発表した先駆者だからである）。つまり、なぜ1870年初頭になって、国籍を異にする3人が時を同じくして限界効用理論を提唱するにいたったのか——という問題が起ってくる。この“同時発見”の理由の解明について、ジイドもエリック・ロール、ハイマンもM. ブローグも解明に懸命の努力はしている。しかし、いずれも納得しがたいものであった。たとえば、M. ブローグは4つの事由をあげて解説したが——すでに述べたとおり——どれもこれも納得しがたいものであった。そこで筆者は、この謎の解明に人口史からの追跡（あるいは、人口転換を用いた人口史からの解説）を試みたところ比較的になんげできる解

説をえたので報告する。

- 注 1) E. Roll, *A History of Economic Thought*, Faber and Faber LTD, 1945, p.374.
- 2) J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, Oxford University Press, 1980. p.919.
- 3) E. Roll, *A History of Economic Thought*, op.cit., p.368.
- 4) E. Heimann, *History of Economic Doctrines*, Oxford University Press, 1962, p.185.
- 5) 伊達邦春「限界効用学派」(『経済学大事典』Ⅲ. 東洋経済新報社, 昭和30年, 230頁所収)
- 6) C. Gide et Rist, *Histoire des Doctrines Économiques*, Cinquième Edition, 1926, p.680.
- 7) W. S. Jevons, *The Theory of Political Economy*, Fifth Edition, Reprint of Economic Classics, 1965, Preface to the second Edition. 小泉信三訳「経済学の理論」(『小泉信三全集』24. 昭和44年文芸春秋, 171～5頁所収) 傍点原著者。
- 8) E. Heimann, *History of Economic Doctrines*, op.cit., pp.251～2.
- 9) *ibid.*, p.205.
- 10) *ibid.*, p.205.
- 11) W. S. Jevons, *The Theory of Political Economy*, op.cit., p.38. 邦訳, 前掲238頁, 傍点原著者。
- 12) *ibid.*, p.44.
- 13) *ibid.*, p.45.
- 14) H. H. Gossen, *Entwicklung der Gesetze des Menschlichen Verkehrs* (Reprint) LIBERAC n. v. publishers, 1967, S. 1.
- 15) *ibid.*, S. 1.
- 16) *ibid.*, S. 1.
- 17) *ibid.*, S. 4.
- 18) *ibid.*, S. 34.
- 19) *ibid.*, SS. 4～5.
- 20) C. Gide, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Halberstadt H. Meyer's Buchdruckerei, 1928, S. 42.
- 21) E. James, *Histoire sommaire de la pensée économique*, Editions Montchestien, 1969, p.189.
- 22) *ibid.*, p.57.
- 23) *ibid.*, p.57.

- 24) H. H. Gossen, *Entwicklung der Gesetze des Menschlichen Verkehrs*, op.cit., S. 12.
- 25) 南亮三郎『人口思想史』千倉書房, 昭和47年, 272頁. 傍点原著者.
- 26) H. H. Gossen, *Entwicklung der Gesetze des Menschlichen Verkehrs* op.cit., S. 24.
- 27) *ibid.*, S. 46.
- 28) W. Lexis, *Allgemeine Volkswirtschaftslehre*, zweite verbesserte Auflage, Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1913, S. 29.
- 29) J. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, op.cit., p.1054.
- 30) *ibid.*, p.1054.
- 31) M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, Third edition, Cambridge University Press. 1978, p.322.
- 32) G. H. Bousquet, *Esquisse d'une Histoire de la Science Économique en Italie*, des Origines à Francesco FERRARA, Libraire Marcel Rivière et C^{le} Paris, 1960. 橋本比登志邦訳, 嵯峨野書院, 1976年, 36頁.
- 33) 同書, 邦訳68頁.
- 34) コッサ, 関末代策訳『経済学史』叡松堂, 昭和5年, 133頁.
- 35) G. H. Bousquet, 前掲, 邦訳, 83頁.
- 36) 同書 105頁.
- 37) 同書 101頁.
- 38) 同書 39頁.
- 39) 同書 124頁.
- 40) 同書 126頁.
- 41) J. K. Ingram, *History of Political Economy*. 米山勝美訳『経済学史』大正14年, 早稲田大学出版部, 438頁.
- 42) E. Salin, *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, Verlag von Julius Springer, Berlin, 1923, S. 34.
- 43) E. Heimann, *History of Economic Doctrines*, op.cit., pp.113~4.
- 44) J. A. Scumpeter, *History of economic analysis*, op.cit., p.869.
- 45) M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, op.cit., p.309.
- 46) *ibid.*, p.309.
- 47) *ibid.*, p.318.
- 48) *ibid.*, p.314.
- 49) G. D. H. Cole, *A Short History of the British Working Class Movement*, George Allen and Unwin Limited & The Labour Publishing Company Limited, vol. II (1848~1900), 1926, p.24.
- 50) E. Roll, *A History of Economic Thought*, op. cit., p.369.

- 51) M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, op.cit., p.312.
- 52) G. D. H. Cole, *A Short History of the British Working Class Movement*, op.cit., p.29.
- 53) J. Hirschberger, *Geschichte der Philosophie*, zweite Auflage, Verlag Herder, Freiburg, 1955, S. 90.
- 54) Vorländer, *Geschichte der Philosophie* (II), Felix Meiner in Leipzig, 1919, S. 419.
- 55) M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, op.cit., p.316.
- 56) E. Heimann, *History of Economic Doctrines*, op.cit., p.82.
- 57) W. Sombart, *Die drei Nationalökonomien*, zweite Auflage, Duncker & Humblot, Berlin, 1967, S. 283.
- 58) 白杉庄一郎『経済学史概説』(下) ミネルヴァ書房, 昭和31年, 316頁.
- 59) M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, op.cit., p.317.
- 60) 玉井龍象「近代経済学の成立と展開」(羽鳥卓也, 吉田静一編『経済学史』世界書院, 昭和54年, 337頁所収)
- 61) W. S. Jevons, *The Theory of Political Economy*, op.cit., pp.266~7.
小泉信三訳, 前掲, 445~6頁.
- 62) 南亮三郎「人口学への道」(『人口論史』勁草書房, 1976年, 9頁所収)
- 63) T. S. Ashton, *The Industrial Revolution 1760~1830*, Oxford University Press, 1980 (reprint) p.2.
- 64) F. Place, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population*, George Allen & Unwin LTD, 1967, p.352.
- 65) T. S. Ashton, *The Industrial Revolution*, op.cit., p.4.
- 66) *ibid.*, pp.3~4.
- 67) 南亮三郎『人口思想史』千倉書房, 昭和47年, 19頁.
- 68) 同書, 20頁.
- 69) 同書, 224頁.
- 70) 安井琢麿『ワルラスをめぐる』昭和45年, 創文社, 10頁.
- 71) E. Salin, *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, op.cit., S. 39.
- 72) *ibid.*, S. 39.